

「日本国家の起源 五島列島に実在した高天原」を読んで

著者 松野尾辰五郎

発行者 著者の次女 村山三枝子(岡山歴史研究会会員)

平成 21 年 7 月 丸善(株)岡山支店出版サービスセンター

A5 版 150 ページ 定価 2500+税

岡山歴史研究会の仲間である村山三枝子氏が、「日本国家の起源 五島列島に実在した高天原」は、昭和 53 年に出版されたご尊父の本を復刻版の形で再度世に問われたもので、平成 23 年 10 月 21～23 日の全国歴史研究会主催岡山大会に参加されたことを機会に私達の目の届くところとなった。著者は大正 5 年生まれで生きておいでなら 95 歳であり、この本が書かれたのは昭和 53 年で 61 歳の還暦を迎えた頃になる。

著者は私の親達の年代で、皇国史観の只中に育ち生きてきた。著作の内容から賀茂眞淵や本居宣長(古事記伝)等の江戸期に活躍した史上有名な国学者や、柳田國男・折口信夫等の民俗学そして万葉集などの古典に造詣が深いことが判る。氏は長崎県の五島列島出身であるが、独善的な郷土妄信タイプの我田引水的思考による記述ではないことは一読すれば良く判る。

その意味で志に反して氏の説が広まらないままの無念さを、娘さん(といっても私と同年代と想定)が意を決して、平成 21 年に再版されたことの意義は大きい。通読して次々と進展する日本書紀や古事記の内容と五島列島に今も残る地名や伝承が、特有の古語の発声・発音の技法を取り入れながらの検証で、読者を不思議な世界に引き込んでくる。知らず知らずの内に著者の説に頷いて誘引されてしまう。

元々記紀や魏志倭人伝に登場する地名や人物・神々は多岐に亘り難解で、その固有名詞の雑多さに我々素人は翻弄され、拳句の果てに迷路に入り出口が判らなくなることが多く、仕舞いには投げ出す事が多い。結果として棚上げし史実化する認識は薄い。しかしこの松野尾氏の、それを史実として検証しようとする熱意と努力には恐れ入る。戦後の波乱に富んだ人生の中でのライフワークの成果を、人生の区切りとして還暦を機に一冊の著作に纏め上げられたのがこの本であろう。確かに労作である。

私は弥生の始まりが稲作伝来と記紀が伝える神武東征が稲作文化の東進と重なっていると勝手に信じ想定している。日本列島は四面を海洋に囲まれ、その上暖流(親潮)の北上は今も昔も変わらない。海人(あま=カイジン)の想像以上の活躍が中国江南から日本列島に水耕稲作の新技术を携えて渡来してきた。元々米(稲)は連作を嫌う代表的な作物にもかかわらず、基本品種ジャポニカは今も連綿と繋がっている。連作の出来るのは「水耕乾田方式」の技術が江南の渡来人によって持たされたことによる。その証に現代の米を陸稲にすれば育つけれども収量は年々減作してしまう。一万年も続いた縄文時代は同じジャポニカ種を陸稲(焼畑農法)で栽培していた痕跡が列島の主に山間部に残っている。九州北部に上陸した江南の渡来人は、海人の力で列島を海から河川を溯上し、水の管理がしやすい小川付近の適地に水耕稲作を始め、暫時下流域に拡張させながら伝播した。稲作文化はわずかな期間(弥生時代)で日本列島を席卷して有史時代に繋がるわけだが、そうした稲作文化と記紀の伝承とが五島列島で重なると論証している。

記紀での伝承は地名や“ことば”に残り、民俗学的に現代まで続いている。神道では中国から約 2500 年前に発生した道教思想を取り入れ祝詞(のりと)や記紀の正史だけでなく万葉の世界へと連綿と繋がって伝承されていて今日五島列島では「チャンココ踊り」(念仏踊り)として稲作文化を今に伝えていると断じている。慣れない論理で直ぐには信じられなくても、反論の余地はない。

文語体で育った教養人の筆者は、現代(戦後)表記を基本にしてこの本を書き上げられたが、昨今の出版物に比べると「やや難しい」文体になっている。ルビも多用してあるが、それでも「忽ち」「恰も」「斯くの如き」などの慣用句は、今の我々には馴染みが薄い。娘さんが再版される機会に、もう少し安易な文体に変えておかれたら、読み易くなっていたであろう。

久々に少々骨の折れる読み物であったが、信念の通った先人の史実の検証に出会った本であった。いつか再読し五島列島を歩んでみたいものである。

2011.23.12.21 読了 感想文として記す 山崎泰二